

## <紙面直言>

### 社会の質表す老人問題—人間化目指す紙面作りを

少し古くなるが、本紙が昨年12月連載した「家を追われて」は、都心を追われる老人の住宅問題という重いテーマに迫った好企画だった。現状報告と問題提起にとどまらず解決策を探った点が印象に残った。たまたま最近、老人(いい言葉ではないが取りあえず使う)が心ない扱いを受けている風景をたて続けに見て重い気持ちになっていたのが深く心にしみた。銀行のカウンターで通帳や書類を広げ、何かを訴えているのだが、納得しないまま対応を打ち切られ「年寄りだと思って・・・」と口惜しそうにつぶやきながら待合のいすにへたりこんだ老人。つえをついて無料パスでバスに乗ろうとしたが、運転手に「ちゃんと見せろよ」と一喝されてすっかりうろたえ、バスを降りてしまった老人。駅の階段でかけ降りてくる学生たちにはじかれて転んだ老女・・・。

もちろん、老人が心のこもった扱いを受けている場面にたびたび出会っていることも言うておかねば公平を欠くだろう。だが先日大衆食堂で隣り合わせた老人が「長生きしてもいいことないですよ。どこへ行っても厄介者ですからね。こないだはある店で『年寄りに用はないよ』と言われました。街へ出るのがだんだんいやになりました」と寂しげに話していた言葉に、いま老人がおかれていた立場が象徴されているように思えた。

連載記事を読み、街頭風景を観察しながら、私は昔読んだボーボワールの「古い」の一節を思い浮かべた。「人間がその最後の10年ないし20年のあいだ、もはや1個の廃品でしかないという事実は、われわれの文明の挫折をはっきり示している」

彼女はこの本で、老人が社会からどう扱われているかによってその社会の質が決まると言っているが、彼女に従えば世界一豊かな国といわれる日本で「文明の挫折」が始まっていると言わざるを得ない。「個室への願望」(2月17日、沖藤典子)は、北欧福祉社会と日本との落差を鮮やかに示してくれた。

このことを人権という観点で見れば女性、障害者、同和、外国籍住民にも共通する問題である。途上国からの留学生や外国人労働者が借間探しに四苦八苦している話はよく聞くが、先日KSP国際フォーラムに出席した米国人学者から「外国人はお断り」と言われたすし屋の話聞いた。日本でも「外国人嫌い」が始まったのだろうか。異質なものが共存している社会こそ正常なのだという、北欧が生んだノーマライゼーションの考え方を私たちがどこまで自分のものにできるかに、日本社会の質の問題がかかっている。

生活の質の向上とか、生活大国という言葉が乱舞し始めているが、それを目指すのであれば何よりも社会の質を人間的ぬくもりのあるものに変えていくこと、人権先進国になることが前提であろう。

本紙が文明開化発祥の地で「文明の挫折」を拒み、社会の人間化のための紙面づくりに励まれるよう期待する。